

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2017 鶴見英成

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



## アンデス文明研究の成果と課題① 遺跡をめぐって

鶴見英成（東京大学総合研究博物館助教）

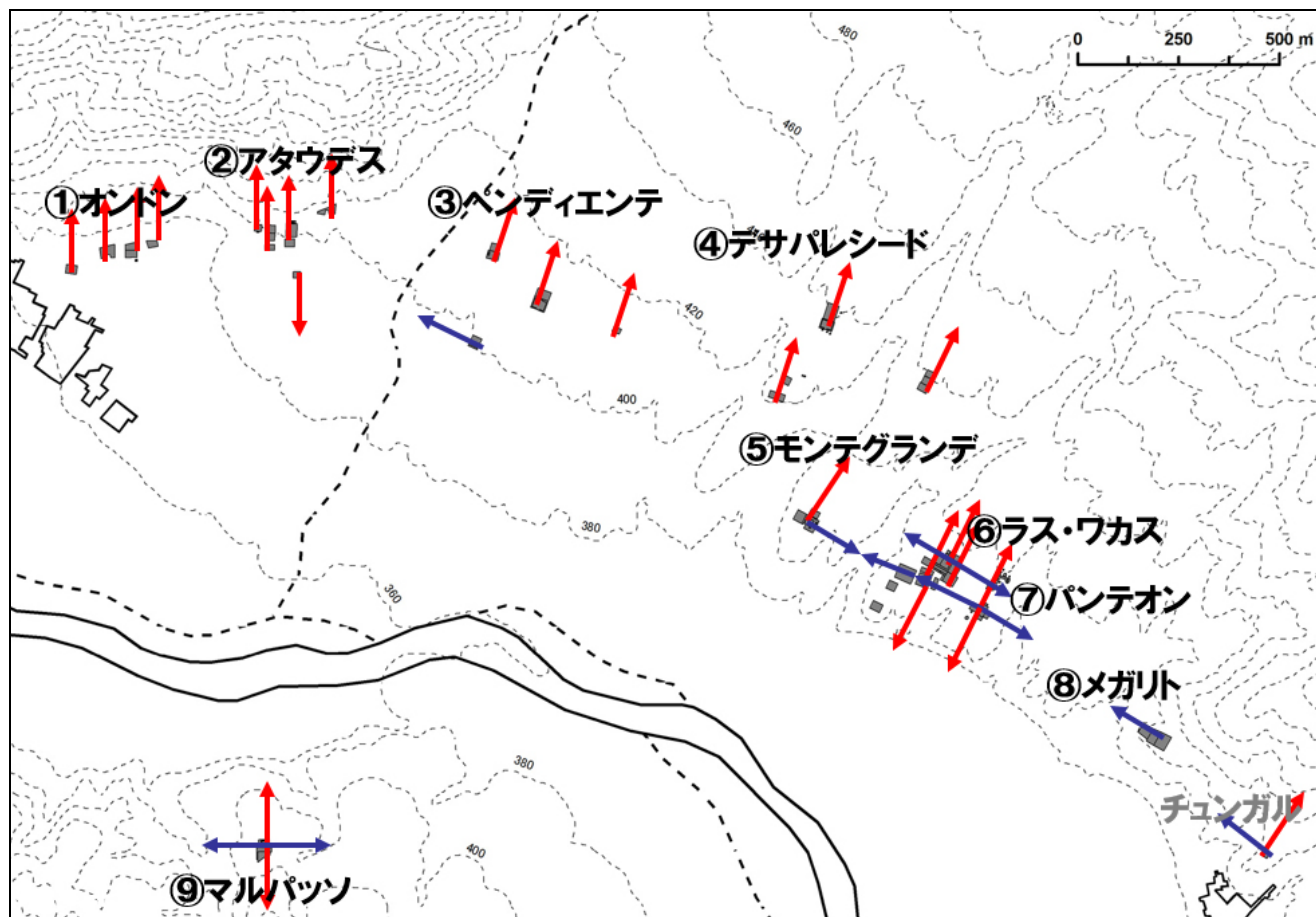
- 神殿**とは、祭祀や集会のための公共的な大規模建築。村落の中核だが、居住域の調査例は少なく不明な点が多い。
- 神殿更新**とは、神殿を作り替える建設活動。従来の建築を核にして一回り大きくしたり、いったん完全に埋めた上にはほぼ同じ規模のものを再度作ったり、隣に継ぎ足していったりと様々なケースがあるが、一般的にこれにより神殿建築は次第に大きくなっていく。更新したいに宗教的な意味があったと見られる。
- 形成期**とは、アンデス文明の社会組織、経済、技術などの基盤が次第に形成された時期（紀元前3000～50年）。

講師は南米ペルーで考古学の研究を進める中で、文化資源・文化遺産としての考古資料をめぐるさまざまな課題に直面することとなった。

●東京大学の1960年代のコトシュ遺跡における調査で、アンデス文明においては土器の導入より早く神殿建築が現れることがわかった。古い神殿建築を埋め、次のものを造るという活動が繰り返されていることから、その活動が人口増・食料増産・技術革新・思想の錬磨・儀礼の壮麗化などを刺激し、それによりさらなる更新が行われるというポジティブ・フィードバックの動態が生まれたと見られる。アンデス文明の始まりはそうのように説明可能である。

●ヘケテペケ川中流域の北岸、アマカス平原には、ラス・ワカス遺跡など形成期の神殿が密集しているが、全てが同時に機能したのではない。以下の理由で神殿の移転がはじまり、やがて儀礼として繰り返されるようになった。

- 1：豊穡祈念。水が豊富で、耕作に適した西の端に最初の神殿は建てられた。
- 2：水害の回避。エル・ニーニョ現象のときに起こる鉄砲水の被害を避けるため、より安全な東側へ移動。
- 3：祖先崇拜。放棄された神殿には、塔状の大きな墓が添えられ、祖先を記念するモニュメント（記念碑）へと変わる。のちの神殿はそれを階段の先、正面に眺望するような、特別な建物を一角に組み込むようになる。



ラス・ワカスなど9つの神殿。赤の矢印は自然地形を上り下りする階段。青の矢印はそれに直行する階段。

以上の研究を行うにあたり、この地域に貯水池が1980年代に築造され、多くの遺跡が水没したことが大きな障害となった。

●神殿は、それ以前の神殿の立地や形態を念頭において建てられる。ならば、その地域で最初の神殿というのはどこにあり、なぜその場所に建ったのか、解明する必要がある。貯水池をわたった南岸、モスキート平原において、神殿遺跡群を擁するモスキート遺跡を発見し、現在調査中である。この平原は現在では乾燥しているが、かつては水資源に富んでいたと見られ、北岸アマカス平原と同じく、農村に付随する神殿群であったことが考えられる。

不毛であるため現在では人の往来のないモスキート平原だが、北岸から車道を通す計画が2016年より始まった。観光開発を視野に入れた展開もありうるが、恒常的な維持管理が難しいため、文化財を傷める結果になることが懸念される。

●モスキート平原、モスキート遺跡の神殿群はヘケテペケ川の流域で最古の神殿という可能性がある。その登場の背景をより広い地理的範囲を視野に入れて考えると、かつて南北方向に谷と谷とを結ぶ道があったのではないかと、という仮説に至った。旅行者と関係すると考えられる岩絵、そして神殿遺跡を多数発見してその概要が明らかになってきた。古代の村落と現代の村落は、しばしば同じ立地条件を満たしていたと仮定することは妥当であるとみられ、現代の村落の附近で形成期の神殿遺跡が多数発見された。

鉱山開発、農地開発などの理由で、遺跡の破壊が進んでいる。遺跡が跡形もなく整地されてしまった場合、古代の道を探すという研究自体が成立しなくなるだろう。

●1960年代に東京大学が発掘したコトシュ遺跡は、壁面レリーフ「交差した手」という分かりやすい象徴的な図像を伴っていたこともあり、ワヌコ市のシンボルとして広く愛されている。2016年からの再発掘プロジェクトは地元から多大な関心をもって迎えられた。

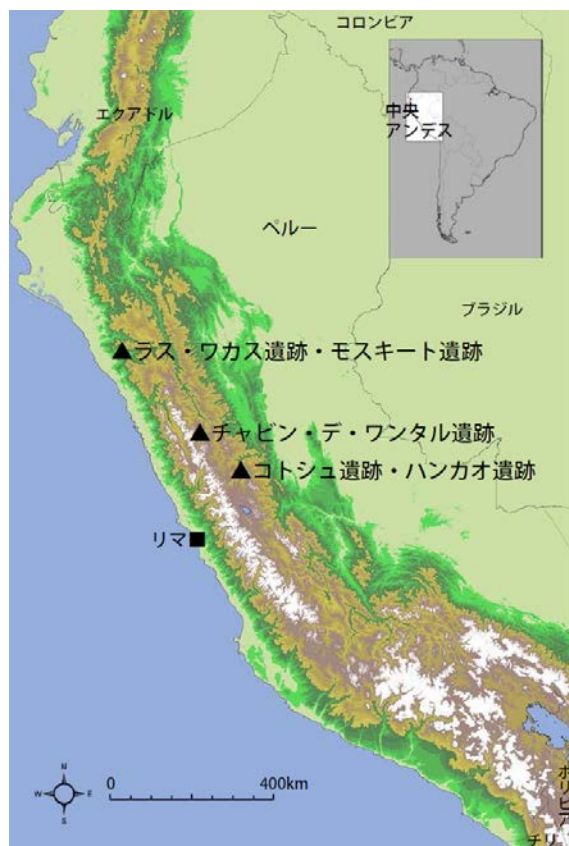
一方、かつてコトシュの神殿とほぼ同規模・同時に機能したと見られるハンカオ遺跡は、30年以上前に幹線道路で断ち割られ、2001年の発見のあとも文化省の保護を受けられず、現在もなお破壊が進行している。

●文明形成期の神殿は、村落と密接な立地を特徴とする。過去の村落と現在の村落は、その立地が大きく変わらない。

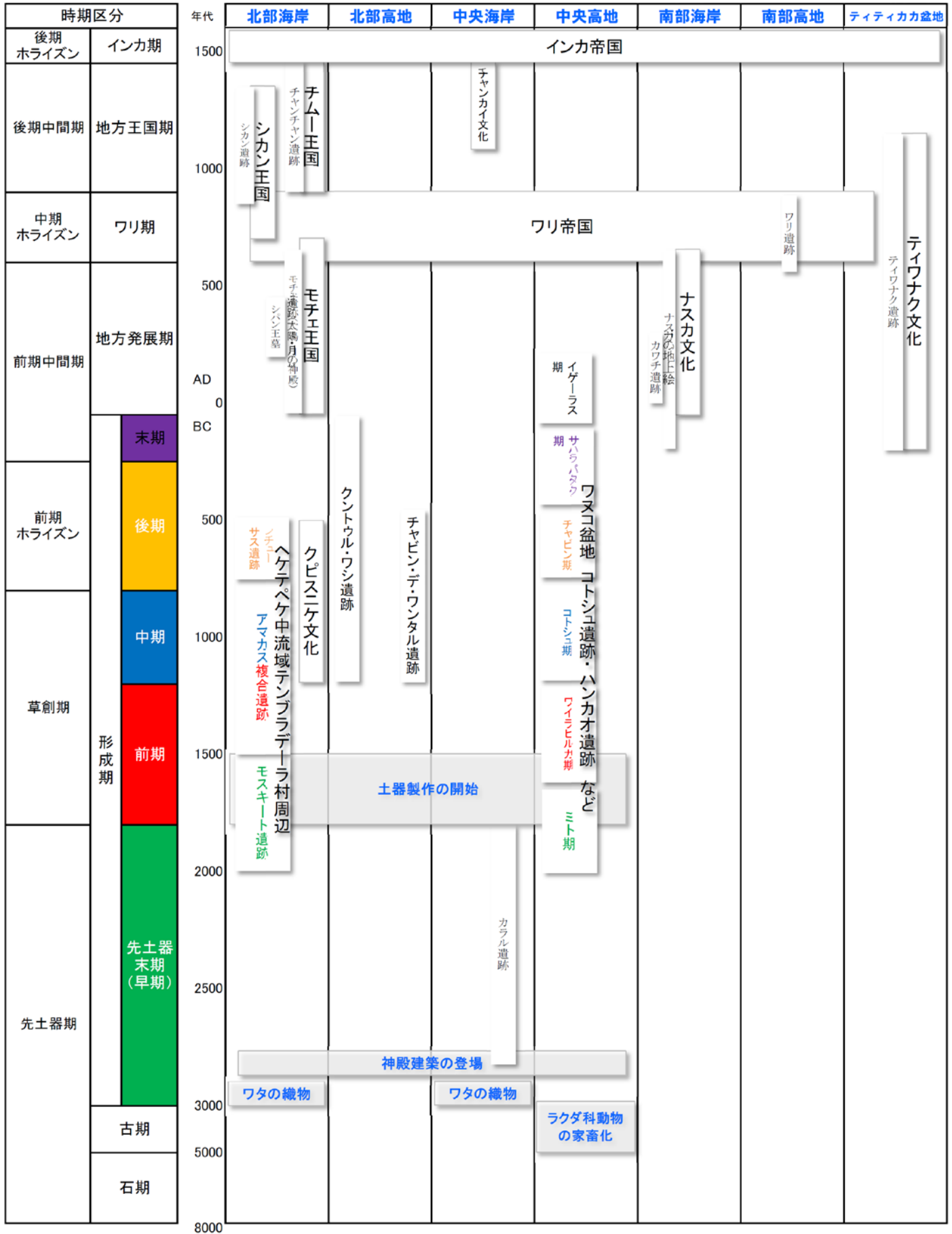
耕作に必要な水が涸れてしまったモスキート平原や、密林に飲まれて人が寄りつかなくなった遺跡などは、結果として保護されることがある。しかし現在の居住域と近接する場合、マウンド遺跡は広い面積を占めるため、開発の対象になる。近年では道路の拡張に伴う破壊がとくに顕著である。

観光開発など、資源として活用されるケースはまれで、短期的な開発の支障として排除されるケースのほうが多い。またすべての遺跡が観光地としての役割を十分に期待できるわけではない。

考古学の研究水準を保つためにも遺跡の保全は重要であるが、どのような提言が可能なのか、事例ごとに判断せねばならない。試行錯誤の段階が続いている。



言及する主な遺跡。



アンデス文明略年表。